論文の和文要旨

論文題目	ラトヴィア語の動詞接頭辞付加 — 空間・時間・感情を表示する言語活動 —
氏名	堀口　大樹

本論文の目的は、話者を中心に据えた言語活動としてのラトヴィア語の動詞接頭辞付加を、アスペクト論と語形成論から記述することである。

序章　本論文について

本論文の問題意識は、言語活動としての接頭辞付加と、言語の規範と実態の衝突に大別される。接頭辞付加には語形成プロセスへの話者の大きな関与が見られる。本論文では、言語活動としての接頭辞付加を、一部の接頭辞付加を批判する規範主義の言語文化論に照らして記述する。

言語文化論で最も批判されるのは、すでに PFV（パーフェクティヴ）の意味があるとされる借用語の動詞を PFV 化する接頭辞付加である（Ozola 1984,　Freimane 1993 ほか）。

本論文の 4 つの学術的意義を挙げる。

① ラトヴィア語学のアスペクト論への様々な視点からの貢献

PFV とインパーフェクティヴ（以下 IPFV）の意味対立やその相対性を明らかにし（第 2 章）、これを元に、借用語の動詞の PFV 化をアスペクト論からより言語の実態に即して再解釈した（第 3 章）。“少し”というアスペクトの意味の接頭辞 pa-を例に、アスペクトと主観的評価の交差点を指摘した（第 4 章）。発話におけるアスペクト的意味の言い直しの分析では、アスペクト的な視点が最初から厳密に定まったものではないことを示した（第 5 章）。

② 借用語の動詞の接頭辞付加の広範な記述

活動的性格の強い借用語の動詞の接頭辞付加の最新の質的・量的な傾向を明らかにし、アスペクト論や語形成論だけでなく語彙論にも貢献した（第 3 章）。

③ 数量データに基づく接頭辞研究

これまでの接頭辞研究ではなかった、借用語の動詞における接頭辞動詞の割合や、各接

頭辞の付加率といった数量的な調査を行った（第 3 章）。

④ 文脈やコミュニケーションの問題を考慮に入れた接頭辞研究

テキストやその校閲における接頭辞動詞や、文脈の中で接頭辞動詞が顕在化する過程を記述し、接頭辞付加の活動的性格を浮かび上がらせた。また、言い直しや類義要素の追加といった話された言葉に特有の現象における接頭辞研究は、“発話の中の接頭辞付加”という全く新しい視座を示す（第 5 章）。

本論文の主な言語資料は新聞や雑誌、ラジオのトーク番組といった、マスメディアの言語である。新聞からの用例収集には、約 15 年間の 64 の定期刊行物が約 480 万本登録されたデータベース『新聞図書館（Laikrakstu Bibliotēka）』（http://www.news.lv）を使用した。

第 1 章　ラトヴィア語の動詞接頭辞の概略

先行研究に従い、ラトヴィア語の動詞接頭辞を概略した。接頭辞は空間的意味を基本に量・時間的意味、そして形式的意味の 3 つの意味を持つ。量・時間的意味は、動作の集中性の高低や動作の開始などの個別的なアスペクトを示す。形式的意味の接頭辞は、動作の空間的意味と一致し、基動詞（無接頭辞動詞）を PFV 化する接頭辞として PFV・IPFV のアスペクト対立に関わる（例：uzrakstīt / rakstīt「書く（PFV・IPFV）」、空間的意味「上」の接頭辞 uz-は形式的意味として機能）。しかし、接頭辞の 3 つの意味の境界は連続的である。

第 2 章　ラトヴィア語のアスペクト

先行研究で指摘されてこなかった問題を中心に、ラトヴィア語のアスペクトを概略した。

PFV・IPFV が示す「非進行・進行」「具体・一般」「結果達成・結果達成への過程」といった意味的な対立は、文脈の中では常に顕在化するわけではなく、中和されることが多い。

アスペクト対立を持ちつつも、語彙的意味が進行中の動作と結びつきにくく PFV に近い動詞（apsēsties / sēsties「座り込む」など）では、IPFV の基動詞は文脈の助けにより PFV 的な動作の反復を示したり、時間補の格表示で動作をプロセス的に示す。これらの動詞では、動詞の語彙的意味が PFV に近いこと自体は、アスペクト対立を成すための障害にはならない。PFV・IPFV それぞれの動詞は、相対的にアスペクト対立を表現している。

無アスペクト動詞の接頭辞動詞を巡っては、時間補語の格表示の違いやタクシスなどの文脈がない限り、語彙的意味だけで対立アスペクトを特定することは難しい。

アスペクト対立をなす動詞の意味対立自体、そして無アスペクト動詞のアスペクトを巡る解釈において、アスペクト対立は相対的な概念である。これは言語文化論で批判される借用語の PFV 化の接頭辞付加を、言語の実態に即して再解釈するために必要である。

第 3 章　借用語の動詞の接頭辞付加

借用語の動詞への接頭辞付加は、語形成の言語活動としての側面を反映する。なぜなら、既存の語形成のモデルを元に、もともと接頭辞が付加されていない借用語の動詞に行われ

る接頭辞付加への話者自身の関与は、“すでに接頭辞付加されている”ラトヴィア語本来の接頭辞動詞の使用に比べて大きいからである。

1230の借用語の動詞と11の接頭辞を元に接頭辞付加の数量的な動向を調査した結果、『新聞図書館』で見つかったのは、理論的に派生が可能な13530の接頭辞動詞中19.5%の接頭辞動詞であった。1つでも接頭辞が付加される借用語の動詞は1230の基動詞中63.7%の動詞であった。接頭辞no-は最も付加率が高く、1230の基動詞中40.0%の動詞に付加される。各接頭辞の付加率は以下の通りである。aiz- (13.1 %), ap- (7.8 %), at- (9.1 %), ie- (25.0 %), iz- (23.3 %), no- (40.0 %), pa- (20.6 %), pār- (23.3 %), pie- (13.8 %), sa- (25.8 %), uz- (13.1 %)。

借用語の動詞のPFV化はアスペクト論で記述されるよりも、もっぱら言語文化論で批判されてきた。PFV化の接頭辞no-は新聞記事の校閲で削除されることもあるが、ラトヴィア語本来の動詞によるアスペクト対立に沿って、アスペクト対立が顕在化する場合もある。

アスペクト対立の相対性を鑑みた際、基動詞にPFV性が認めやすいこと自体はアスペクト対立の形成の障害にはならない。基動詞に接頭辞no-を加えることで相対的にno-動詞はPFVの動詞になり、基動詞は相対的にIPFVの動詞になると解釈できる。この再解釈は、アスペクト論に拠らなかった言語文化論の批判の根拠の弱さを指摘し、言語の実態により近い記述を可能にする。

この再解釈をもとに、PFVのno-動詞を例に、PFV・IPFVの意味対立や統語的特徴、モーダル的な特徴などを論じた。言語文化論で推奨される、文中の動詞のアスペクトの統一（Freimane 1993）は、言語文化論で批判される借用語の動詞のPFV化を擁護することになり、言語文化論の矛盾が指摘される結果となった。

接頭辞no-は本来「下」「離」という空間的意味を持つが、多くの場合は形式的意味の接頭辞として、広い語彙的意味の基動詞をPFV化する。付加率の高い他の接頭辞（sa-とiz-）と比較して、接頭辞no-は空間的意味を持たず、基動詞との語彙的関連性が希薄なまま基動詞のPFV化に特化している。この点で接頭辞no-は、空間的意味や基動詞との語彙的関連性を持ち形式的意味の接頭辞として機能する他の接頭辞よりも、“より形式的な”接頭辞である。他の接頭辞が件数では優勢である中で、少数ながらも用例が存在することが、接頭辞no-の付加率を高めている要因と考えられる。

第4章　動詞接頭辞付加の感情的側面

接頭辞pa-を例に、動作の小ささを示すラトヴィア語の縮減アスペクトと、ものの小ささを示す名詞の指小を相関させることで、アスペクトと主観的評価の交差点を示した。

指小と縮減アスペクトは、異なる意味カテゴリーを形成し、異なる品詞に属している。しかし接辞（接尾辞である指小辞と接頭辞）により元の語の意味を修正し、ものや動作の客観的な“小ささ”や、話者による主観的評価を示す点で共通する。その評価の対象は、語が直接示すものや動作だけでなく、広くそのものや動作に関係する事象にもなる。

接頭辞pa-は、時間限定アスペクトと縮減アスペクトを示す。動作の短い継続時間を示す

時間限定アスペクトは、指小形が示す実際のものの小ささに例えられる。縮減アスペクトは、話者が動作を心理的に軽く捉えることからより主観的であり、指小形が示す主観的側面に相関する。pa-動詞は縮減アスペクトを残しつつ、または残さずに、動作やそれに関係する事象への話者の主観的評価を示す。しかし、指小形が実際の小ささと主観的評価を同時に示しうるように、pa-動詞も時間限定（客観的な時間の短さ）と縮減アスペクト（主観的評価）を同時に示すこともある。

同じ事象に対して用いられる pa-動詞、基動詞や他の接頭辞動詞を比較することで、pa-動詞の主観的評価の表出は特に特定しやすい（例：2008 年のロシア軍によるグルジア攻撃について sabombardēt / bombardēt「爆撃する（PFV・IPFV）」に対する pabombardēt）。主観的評価を示す pa-動詞の文脈には、同様に主観的評価を示す指小形や口語に特徴的な語彙の使用が目立つ。指小形と pa-動詞は言語文化論の批判対象でもあり（Baltiņa 1977, Freimane 1993 など）、テキストの校閲で削除されることがある。これは、主観的評価の表示に社会的制限があること、主観的評価の表出が文の命題に大きく影響を及ぼさないことを示す。

第 5 章　コミュニケーションにおける接頭辞の諸相

接頭辞動詞の語形成関係が顕在化するタイプを 1）基動詞と接頭辞動詞、2）同じ接頭辞を持つ異なる基動詞、3）異なる接頭辞を持つ同じ基動詞に分け、文学作品、新聞、ブログ、広告といった書かれた言葉と、話された言葉を素材に、接頭辞がコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしていることを論じる。

話された言葉では、言い直しに見られる接頭辞動詞を論じた。本論文で扱う言い直しは、言い間違いの訂正だけでなく、説明的性格や補足的性格を持つ言い換えや類義要素の追加も含めた現象として広く理解する。どの行為も話者の思考の過程を反映し、話者が聞き手の理解を得るために行う話者主体の行為である。

広い意味での言い直しにおける基動詞と接頭辞動詞、また接頭辞動詞間の語形成関係の顕在化では、話者が接頭辞を加えたり逆に取ったり、変えたり逆に変えないことで、アスペクト的意味や空間的意味を変化させたり、反復を行い、明確化や強調をしている。

話された言葉における接頭辞動詞の言い換えや類義要素の追加には、書かれた言葉における接頭辞動詞へのスラッシュなどの記号の使用が対応する。

最後に、話された言葉に見られる言い直しから、接頭辞付加が話者主体の言語活動であることを浮き彫りにする“接頭辞の選択”の問題について考察を試みた。

第 6 章　結語

本論文の簡単な要約と、今後残された課題を結語とした。